

高齢者介護と女性の就労

— ロンズボダ（スウェーデン）の事例 —

Elderly Care and Care Workers in Lönsboda, Sweden

小林 月子*

KOBAYASHI Tsukiko

小縣真希子**

OGATA Makiko

キーワード：高齢者介護，女性の就労，サービスハウス，地域，継続性，スウェーデン

1. はじめに

高齢者人口（65歳以上人口）の割合が10%を超えれば，高齢化にまつわる様々な問題が社会問題化するとよく言われる。日本の高齢化の特徴は，それが極めて急速に進行し，しかもその程度が高いことにある。ゆっくりと高齢化の進行している国，たとえばスウェーデンなどと比べるとそのことがよく分かる。スウェーデンは，1950年にはすでに65歳以上の人口が全人口の10.2%を占めていた。その後ゆっくりと高齢者人口の割合は上昇していくが，2005年においても17.8%である。2050年の推計でも高齢化率は23.6%にとどまる見込みである。

国勢調査によると，日本では1950年にはわずか4.9%であった高齢化率は，その後上昇し，1985年には10.3%と，10%を超えた。その後，高齢化率は急上昇を続け，2005年には20.1%となった。国民の5人に1人が高齢者となったのである。今後とも上昇を続け，日本の高齢者人口の割合は，2050年に39.6%となる見込みである。

このように急速な高齢化は，社会のあらゆる側面に影響を及ぼす。とりわけ，高齢者の介護は急を要する問題である。介護を要する高齢者の数は年々増加し，2005年3月現在では394万人が介護保険による要介護認定を受けている。65歳以上人口のおよそ15.4%にあたる。介護保険が2000年4月1日に発足して以来，利用者，利用額とも伸び続けている。発足当初は，介護サービスを利用することにためらいを感じる利用者やその家族も少なくなかった。とはいえ，在宅介護にしても施設介護にしても，サービスの質も量もまだ充分とは言えない。とりわけ高齢化率の高い過疎地においては，サービスの量が不十分であったり，利用できるサービスに限界があったりする場合が多い。そのため，介護を求めて住み慣れた地域を離れる高齢者が出現することになる。その結果，この地域の過疎化がいちだんと進行し，最悪の場合には地域社会そのものが崩壊の危機にさらされることにもなる。

このような悪循環を断ち切る有効な方法のひとつが，地域医療・地域ケアシステムの構築にあると思われる。介護を要する高齢者が，たとえ1人暮らしであっても，たとえ同居する家族の介護力が不十分であっても，安心・安全に暮らしていけるシステムがあれば，その人はその地域を離れる必要がない。その地域に住み続けられるのである。他方，そうした高齢者に医療・看護・介護サービスを提供することを仕事にしている人たちにとって，そうした地域は彼らの職場となる。看護・介護，あるいは治療といった専門的なサービスを媒介として，地域の高齢者と若い世代は結びつくことができる。

すでに日本より早く高齢化を経験し，高齢者の介護問題に直面したスウェーデンが，介護の社会化を実現していることは周知の事実である。

* 岐阜大学・教育学部・社会科教育講座・教授

** 岐阜大学大学院・教育学研究科（修士課程）社会科教育専修 1年，中津川市立加子母小学校・教諭

本論文の目的は、高齢化の進行した地域社会で、公的な介護サービスを媒介として、高齢者とそれより若い世代が地域の中で共存していけるシステムの現状を報告することである。

スウェーデンの地域社会で行われていることが、そのまま日本の地域社会にあてはまるわけではない。しかし、スウェーデンの地域社会で実現され、本格化しているシステムは、現在高齢化と過疎化に悩む幾多の日本の地域社会にとって参考になることは確かである。

調査の方法について簡単に述べておこう。我々は、2回にわたってスウェーデン南部スコネ県オズビーコムーニ内のロンズボーダで現地調査を行った。1回目は、2006年11月2日、2回目は2006年12月26日より12月29日までの4日間である。オズビーコムーニの行政担当者及び介護施設の利用者や、そこで働く人々への面接調査、資料収集等を行った。すべての調査には、ルンド大学日本語学科学学生であり、サービスハウスで准看護師として働くニーナ・ラスク氏が同行し通訳をしてくれた。

2. オズビーコムーニの概要

1) 調査対象地の地理的概要

スウェーデンは、歴史的に地方自治体が大きな権限をもつ国である。福祉や教育、保育、環境、文化など、市民の身の回りに直接関係する諸課題は、基本政策を除いてほとんどが自治体（コムーニ）の権限で行われている。ただし、医療については、技術的な水準をコムーニで保つことが難しいと考えられ、県（ランスティング）が対応している。現在スウェーデンには、23の県がある。コムーニについては、かつて2,500の市町村が存在したが、1950年代と1970年代に全国的に市町村合併の政策がとられたことにより、現在の286のコムーニ（自治体）となった。

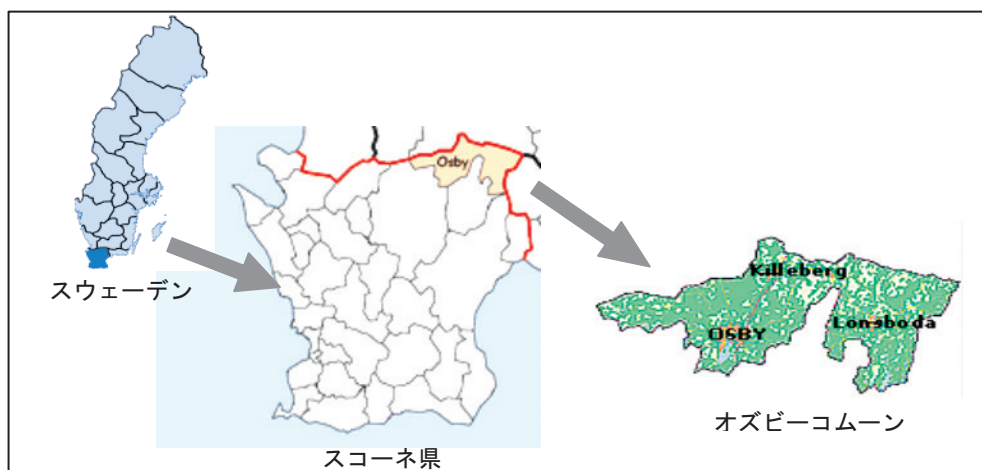


図1 オズビーコムーニの位置

S C B ホームページ <http://www.osby.se>より作成

オズビーコムーニ（以下オズビーと略）は、スウェーデン南部のスコネ県の北部にある、人口13,000人弱の小さなコムーニである。1974年に当時のオズビーとその周辺のキルベルグ、ロンズボーダ、ヘッケンが合併して、現在のオズビーという自治体となった。旧オズビー市街がコムーニの中心地となっている。市庁舎や図書館、公民館といったコムーニの主要機関や、高齢者や障害者のための施設、高等学校、大型スーパーやレジャー施設などが集中している。

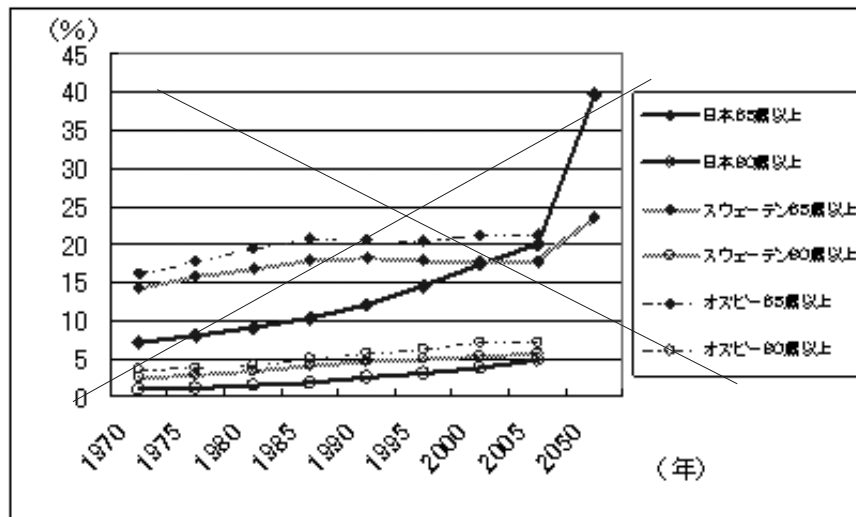


図2 日本、スウェーデン、オズビーの高齢化の推移

表1 日本、スウェーデン、オズビーの高齢者人口と割合

		1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2050 (推計)
日本	65歳以上人口 (人)	7,331,060	8,865,429	10,647,356	12,468,343	14,894,595	18,260,822	22,005,152	25,672,005	37,641,000
	割合 (%)	7.1	7.9	9.1	10.3	12	14.5	17.3	20.1	39.6
	80歳以上人口 (人)	945,158	1,199,503	1,623,013	2,218,184	2,955,272	3,880,510	4,848,037	6,339,097	—
	割合 (%)	0.9	1.1	1.4	1.8	2.4	3.1	3.8	4.7	—
スウェーデン	65歳以上人口 (人)	1,103,428	1,285,106	1,398,893	1,493,070	1,566,106	1,583,001	1,571,240	1,605,007	16,502,439
	割合 (%)	14.2	15.7	16.8	17.9	18.3	17.9	17.7	17.8	23.6
	80歳以上人口 (人)	203,644	240,660	281,447	333,801	392,661	439,637	479,460	514,859	—
	割合 (%)	2.5	2.9	3.4	4	4.6	5	5.4	5.7	—
オズビー	65歳以上人口 (人)	2229	2459	2680	2805	2818	2776	2698	2682	—
	割合 (%)	16.2	17.8	19.5	20.7	20.5	20.4	21.2	21.2	—
	80歳以上人口 (人)	500	519	560	659	764	842	901	—	—
	割合 (%)	3.6	3.8	4.1	4.9	5.6	6.2	7.1	7.1	—

図2、表1とも日本に関する統計(1970年～2005年)は、総務省統計局「日本の統計2006」より作成

スウェーデンに関する統計(1970年～2005年)と2050年の推計は、SCBホームページ<http://www.scb.se>による統計を基に作成
日本の2050年の推計は、国立社会保障・人口研究所<http://www.jpss.go.jp>が、死亡・出生を中位として算出したものを基に作成

今回調査を行ったロンズボーダは、オズビーの中心から東へ約25kmの距離にあり、人口は2000人弱である。周囲は平地林であり、湖や畑が点在している。1970年代にロンズボーダの鉄道の駅は廃止され、バスターミナルとなった。このバスターミナルとオズビー駅との間を、バスが平日に12本、休日に2本往復している。所要時間およそ25分である。旧庁舎はロンズボーダの中心地にある。立派な建物ではあるが、現在庁舎として使われていない。その代わりに、街の中心のバスターミナルに隣接して、市庁舎の出先機関 (Service kontor) がある。ごく小さな一部屋の事務室で、およそ20㎡ほどの広さである。市の職員が1名、週に2日 (月曜日は11:30～17:00、水曜日は10:00～17:30) 詰めている。ロンズボーダの中心には、小中学校が1校ずつ、就学前の児童用の学校、高齢者のためのサービスハウスが2つ (それぞれBergfast, Soldalen)、ヘルスケアセンター (診療所、医師1人)、薬局、

郵便局、消防署がある。その他にも、スーパーやレストラン、コンビニエンスストアを併設したガソリンスタンドがあり、その周辺に住宅が集まっている。

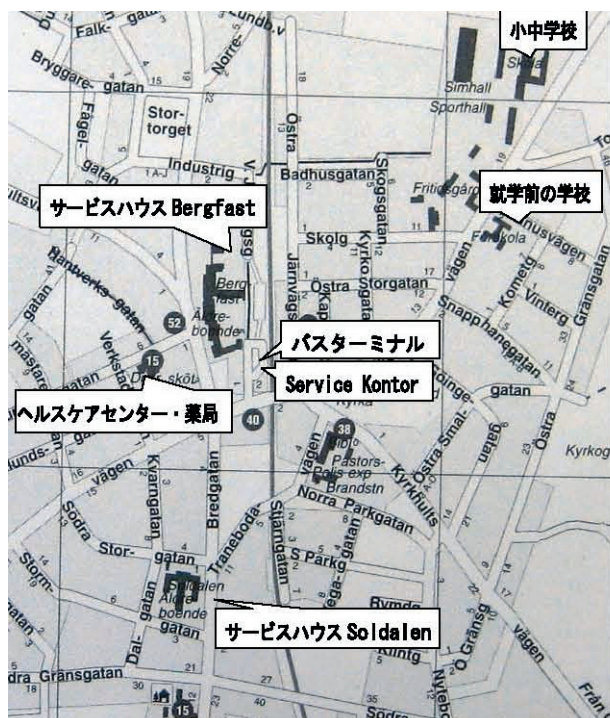


図3 ロンズボーダの中心部

KARTGUIDEN OSBY KOMMUN 2006より地図を引用

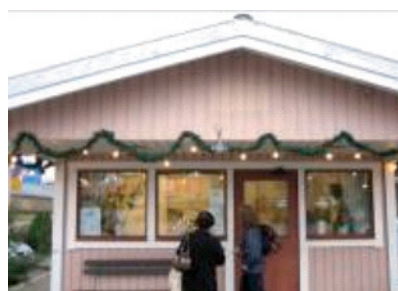


写真1 Service Kontor (市庁舎の出先機関)



写真2 バスターミナル (奥に見えるのがサービスハウス Bergfast)



写真3 サービスハウス Bergfast



写真4 サービスハウス Soldalen



写真5 小中学校

小中学校は同じ敷地内にあり、近くに就学前の児童のための学校もある

写真1～5：2006年12月27日筆者撮影

2) 人口・財政

オズビーの人口は12,600人、ロンズボーダの人口は1,863人(2005.12.31現在)である。オズビー全体の人口は年々減少傾向にあり、ロンズボーダでは特に著しい(図4)。

人口減少は、コムーンの中の産業、特に工業が衰退したことによると考えられる。コムーンの担当者、エリック・ヨンソン氏によると、安い商品の輸入やインドや中国への企業の進出が、その原因であるという。図5のオズビーの人口構成を見てみると、20代から40代の人口の割合がスウェーデン全体の同年代の人口よりかなり低くなっており、その年代の人口が他地域に流出していることが分かる。

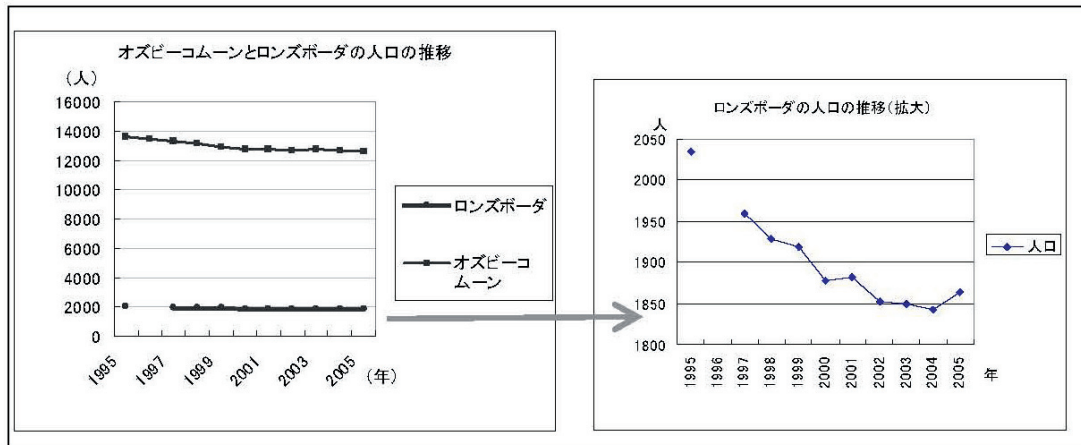


図4 オズビーとロンスボータの人口の推移

オズビーのホームページ <http://www.osby.se> kommunfaktaより作成

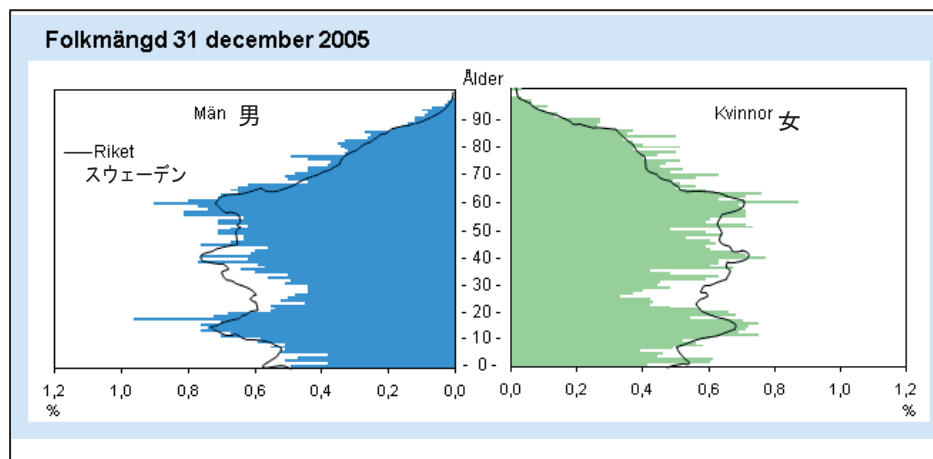


図5 オズビーとスウェーデン全体の人口構成の比較 (2005年)

オズビーのホームページ <http://www.osby.se> kommunfaktaより

次に、オズビーの財政を見ていこう。1974年の合併以来、諸経費の効率的使用に努力してきたとはいえ、現在のオズビーの財政に余裕があるというわけではない。驚いたことに、ロンスボータには交番もない。また、すでに述べたように市庁舎の支所すら週2日しか開かれていないのである。オズビーの支出の内訳は、図6のようである。全支出の47%を教育が、37%を介護・看護が占めている。この2つで84%を占めているのである。

このことから、オズビーの主たる事業は、教育と介護・看護に特化していると言っても過言ではない。

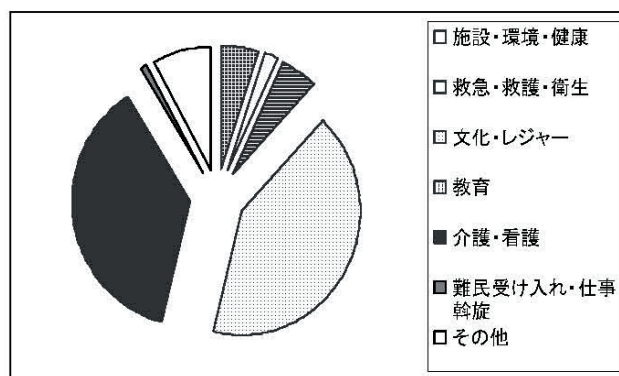


図6 オズビーの支出 2004年

オズビーのホームページ <http://www.osby.se> ekonomiより

3) 介護・看護サービス

まず、オズビーの主たる事業となっている、介護・看護サービスについて、表2を見てみよう。これは、ホームケアサービスや、サービスハウス、グループホームで介護や看護サービスを受けたり、移送サービスを利用したりしている住民の割合を示している。男性のおよそ8人に1人、女性のおよそ6人に1人がホームケアサービスを利用している。サービスハウス等で介護を受ける人は、男性のおよそ7人に1人、女性のおよそ6人に1人である。タクシーの割引券を利用する80歳以上の女性は60%にも上っている。

オズビーの特徴として、ホームケアサービスを受けている住民の割合が若干低く、移送サービスを利用している高齢者の割合が高くなっている。しかし、スウェーデン全体の特徴とおおむね相違はない。オズビーにおいては、スウェーデンの標準的なレベルの介護・看護サービスが実現されていると思われる。

表2 介護サービスの内訳 2005年 単位：%

	オズビー		スウェーデン	
	男	女	男	女
ホームケアサービス	12	17	15	23
特別な住居（サービスハウスなど）	14	18	12	19
移送サービス利用（80歳以上）※	39	60	33	50

※移送サービスのみ2004年の統計 オズビーのホームページ <http://www.osby.se> kommunfaktaより作成

ここで、オズビーの、高齢者のための住居（主にサービスハウス）とホームケアサービスについて、かいつまんで述べよう。

オズビーには、4つのサービスハウスがある（表3）。サービスハウス（sernicehus）とは、「いわゆるケアつきアパートであり、一般に、自立して生活できる高齢者や介護度のそれほど高くない高齢者が入居する。各人の居住部分は、35～65㎡程度の広さであり、台所、トイレ、シャワー（浴室）が付く。…（中略）…職員が24時間体制で勤務しており、一般住宅の居住者と同様、必要に応じてホームヘルプサービスを利用することができる。」¹⁾とされている。サービスハウスの他にも、障害をもった人のためのデイセンターや、小規模なグループホームがあり、高齢者もそれを利用することができる。こういった施設やサービスは、オズビーではすべて公的なものであり、民間業者の参入は現在のところない。

表3 オズビーのサービスハウス

	Bergfast	Soldalen	Rönnebacken	Lindhem
サービスハウス部分の住居数	38	11	18×3 部屋	34
グループホーム部分の住居数	—	7	—	28
併設のショートステイの住居数	4	—	※	—
デイセンターの有無	○	—	※	—

※Rönnebackenのショートステイとデイセンターはリハビリ専用である。

オズビーのホームページ <http://www.osby.se> bände äldreより作成

ホームケアサービスの詰所は、オズビーの中心地にあるサービスハウスLindhemと、ロンズボーダのサービスハウスSoldalenにある。オズビーの東側をSoldalenの詰所が、西側をLindhemの詰所が担当しており、それぞれを拠点としてケアワーカーやナースが巡回している。緊急通報体制や、夜間の巡回もあり、24時間運営されている。

4) オズビーの女性の就労

次に、16歳以上のオズビーの住民の男女別雇用分野をしてみる。表4では、民間企業と、公営企業に勤務する男女別の人口が示されている。特に注目すべき点は、公営企業で働く女性が男性を大きく上回っているという点である。

さらに、オズビーの産業別就業人口の割合をみてみよう（図7）。貿易関係と工業が上位を占めていることが分かるが、ここで注目したいのは、介護・看護と教育に占める女性の割合の高さである。特に介護と看護については突出しており、女性のおよそ29%がその分野の職業に就いているのである。

以上のことから、オズビーの女性にとって、介護と看護が主な就労分野となっていることが分かる。

表4 民間企業と公営企業の就業者の男女別雇用分野 2004年（16歳以上のうち）

		昼間		夜間	
		男	女	男	女
オズビー（人）	計	2,365	2,105	3,112	2,519
	民間企業	2,096	990	2,821	1,277
	公営企業	269	1,115	291	1,242
スコーネ県（×1,000人）	計	258	241	264	244
	民間企業	217	125	222	127
	公営企業	40	116	42	117
スウェーデン（×1,000人）	計	2,169	1,994	2,176	1,997
	民間企業	1,826	1,040	1,833	1,042
	公営企業	343	954	343	954

オズビーコムーンのホームページ <http://www.osby.se> kommunfaktaより作成

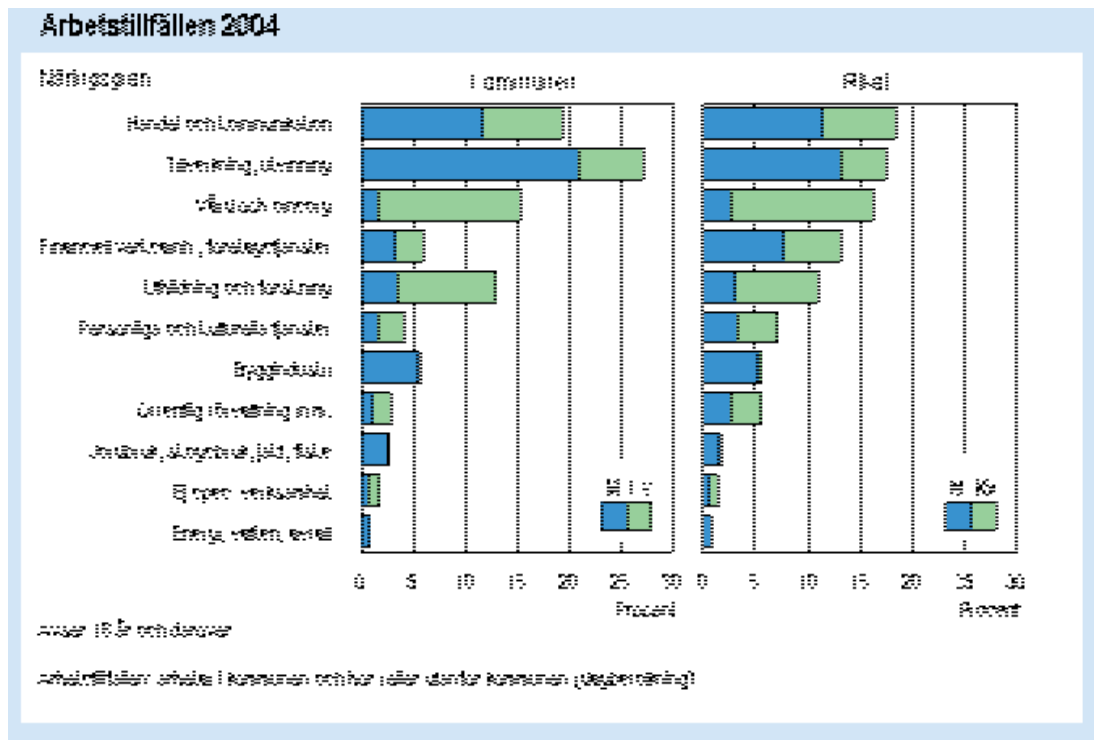


図7 オズビーの産業別就業人口の割合 2004年

オズビーのホームページ <http://www.osby.se> kommunfaktaより作成

ここまで明らかにになったことを整理しておく次のようになる。

第1に、介護と看護は、教育と並んでオズビー・コムーンの主な事業であり、スウェーデンの標準的なレベルの量のサービスを提供することができている。

第2に、介護と看護が、オズビーの女性にとって主たる就労分野となっている。

以下に、これらを検証するために、ロンズボードの介護・看護サービスの事例をみていこう。

3. ロンズボードにおける介護・看護サービス

1) 2つのサービスハウス BergfastとSoldalen

オズビーにある4つのサービスハウスのうち、ロンズボードにあるものはBergfastとSoldalenである。(図3)

サービスハウスBergfastは、定員が40名（うちショートステイ4）のサービスハウスである。1989年に建てられた。ケアワーカーをはじめ、総勢51名のスタッフが働いている。ここには、40名分の集合住宅部分と、レストラン、図書館、歯科診療室、アクティビティ用の部屋があり、デイセンター部分も併設されている。これらはすべてサービスハウスの入居者だけでなく、地域の住民に解放されている。例えば、365日営業されるレストランには、地域の住民が食事に集まってくる。我々が訪問した12月27日には、サービスハウス外から17名の利用者があった。彼らは互いに知り合いで、会話を楽しみながら1人45クローネ（高齢者は40クローネ）の昼食を取っていた。毎日のように利用しているという近所の高齢者も少なくない。玄関近くの掲示板には、運動や趣味の教室などのサークル活動の案内が数多く掲示されている。週1回行われる運動サークルには、平均して30人ほどの参加者が、集まってくるという。我々がたまたまこの運動に参加したときには、クリスマス休暇中で、8人（男3人女5人）の参加者と2名の職員がいた。そこでは、運動することだけでなく、そこに参加して、互いに話をしたり聞いたりすることも大切にしている。Bergfastは、地域住民の交流の場なのだ。

サービスハウスSoldalenは、1970年代前半に老人ホームとして建てられた。ここには、20人の高齢者が住んでいる。うち7人が認知症であり、このサービスハウス内のグループホーム部分で暮らしている。地下にはホームケアサービスの詰所がある。これら2つのサービスハウスの提供するサービスの質や量に差はなく、空きのあるほうに入居することになっている。部屋の広さは2つのサービスハウスともおよそ40㎡から60㎡で、トイレ、風呂、台所のついた住居である。単身で入居している人もいれば、夫婦や友人同士のペアで入居している人もいる。

どの入居者も、腕時計型か首からさげる型の緊急アラームを身に付けている。グループホームの入居者は、認知症のため自分で緊急アラームを押すことが困難である。そこで、当人がベッドを離れたたり、部屋をでたりすると、それを察知して詰所に自動的に通報するアラームがとりつられている。ここでは、補助器具も多用され、手押し車や車椅子、起き上がるときのリフトなどが、一人一人の部屋に備え付けられている。これらは、スコーネ県が、利用者に保険料負担だけで貸し付けているものである。

このように、サービスハウスBergfastとSoldalenにおいては、高齢による病気や障害によって体が弱くなっても、認知症になっても高齢



写真6 Bergfastの運動サークル
誰でも参加できる
2006年12月27日筆者撮影

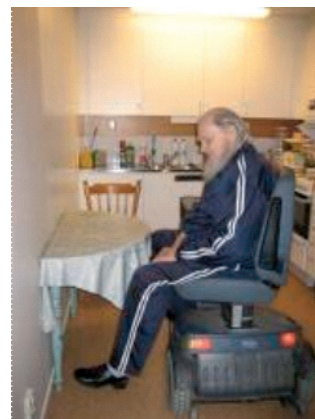


写真7 Bergfastの入居者
車から借りた電動車いすで、
毎日外出している
2006年12月28日筆者撮影

者は安心して住むことができる。

現在、入居を希望している高齢者が数多くおり、“入居待ち”の状態が続いているほどだという。

入居者は、ほとんどが地元、つまりロンズボーダおよびその周辺から来ている。表5によれば、2つのサービスハウスの住人61人中41人(67%)がロンズボーダの住民である。ロンズボーダを含む教会区であるオルケネン地区を含めれば、57人(93%)がロンズボーダおよびその周辺の住民である。つまり、9割以上の入居者が、それまで暮らしてきた、なじみの地域の中のサービスハウスで暮らしているのである。

さらに入居者のみでなく、2つのサービスハウスで働く職員の居住地を表したのが図8である。これを、入居者の居住地と並べてみると、割合の配分が酷似していることが分かる。入居者のみでなく、職員もロンズボーダとその周辺の住民なのである。つまり、地域の高齢者の介護や看護を、その地域の住民が、専門的に、また報酬を得て行っているということである。

表5 入居者の居住地 単位：人

	Bergfast (うちショートステイ)	Soldalen	計 (%)
ロンズボーダ	26 (0)	15	41 (67)
オルケネン (ロンズボーダを除く)	11 (1)	5	16 (26)
オズビーコムーン (オルケネンを除く)	2 (2)	0	2 (3)
オズビーコムーン以外	1 (0)	0	1 (2)
不明	1 (0)	0	1 (2)
計	41 (3)	20	61(100)

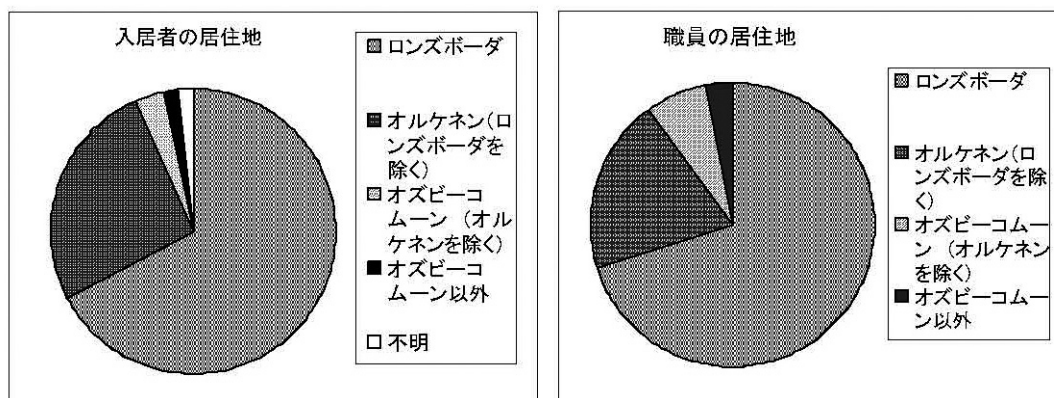


図8 入居者と職員の居住地の比較

表5、図8ともにサービスハウスBergfastの施設長、エバ・ヨンソン氏からの聞き取りにより作成 2006.12.28現在

2) ホームケアサービス

先にも述べたように、ロンズボーダのホームケアサービスの詰所は、サービスハウスSoldalenの地下にある。24人のケアワーカーと、10人のナースがホームケアサービスにあたっている。10人のナースは主に訪問看護を行うが、週末や夜間は交代で2つのサービスハウスの内勤ナースも兼ねる。施設サービスと在宅サービスは、担い手の点でも運営の点でも、相互に連携している。外山によれば、「在宅ケアと施設ケアの関係は、本来相互補完的であり、車の両輪のように同時に改革され、推し進められるべきものであろう。こうして編み上げられ、地域において展開されるのが、在宅ケア、施設ケアを止揚、包摂する地域ケアと呼べるものであろう。」²⁾ こうした意味での地域ケアを実現するた

めに、ここの詰所で担当しているホームケアサービスの範囲は、半径およそ10kmほどである。多くは一人暮らしの高齢者であるが、中には高齢ではないが障害をもっている人や、家族と同居している人もいる。2006年12月現在、60人がホームケアサービスを、35人が配食サービスを利用している。また、100人が在宅でアラームを持っている。

ケアワーカーやナースは、1人、またはペアで、乗用車で巡回する。我々は、3人の住民への訪問看護に同行することができた。看護師のマリアさんと、准看護師であり、通訳も行うニーナさんにつれられ、3軒を廻った。詰所に戻るまでの走行距離はおよそ25km、その中で最も遠い家は、詰所から10kmほど離れた場所にあった。3軒とも、街から離れた森林の中の一軒屋であった。サービスハウスの住居と同様、どの家の中も整然としている。95歳の1人暮らしの男性は、訪問看護師に週1回の投薬管理を受け、毎日ホームケアサービスを受けて、悠々と暮らしていた。

ホームケアサービスを受けている住民も、サービスハウスと同じように、緊急用アラームを装着していた。アラームを押すと、電話機の下装置がそれを受信し、自動的に詰所にダイヤルした。そして1分40秒ほどすると、詰所の携帯電話からの応答が聞こえてきた。今回は実験的な通報であるためここまでであったが、実際はこの後に、最も近くを巡回しているナースかケアワーカーが駆けつけることになっている。巡回している車は、日中7台、夜間は1台である。こういったシステムにより、一人暮らしをしている高齢者も、その家族も安心してそれぞれの生活を送ることができる。

また、同行してみてもどの家でも感じたのが、ナースと利用者との関係がよいことである。1軒あたり20分～30分の滞在時間であったが、投薬や検診のみでなく、会話を楽しみながら和やかな雰囲気が常にあった。なかには、外でナースの到着を待っている人もいた。緊急通報はもちろんのこと、こういった信頼関係も、安心して生活するための重要な要素となっているのではないだろうか。お互いが同じ地域で暮らす顔見知りだということも安心の支えとなっているのである。



写真8 ホームケアサービスのケアワーカー、ナースの詰所



写真9 訪問看護の利用者(95歳)週1回の訪問看護と、毎日のホームケアサービスを受けながら一人暮らしを続けている
利用者の左が准看護師のニーナさん、右が看護師のマリアさん、右端の小林が抱いているのが飼い猫のピーター



写真10 緊急アラーム(首からさげるタイプ)

写真8～10：2006年12月29日筆者撮影

4. ロンズボダの女性の介護・看護への就労

1) 職員の構成

次に、サービスハウスBergfastとSoldalen、ホームケアサービスの職員構成を、表6から見ていこう。職員数は、総勢113.5人である。男女比に注目してみると、114人の中に男性職員はBergfastのケ

アワーカーの1人のみである。ここからも、先に述べたように、オズビーコムーンの女性にとって、介護と看護が主要な就労分野となっていくことがよく分かる。

サービスハウスBergfastの職員の年齢構成(表7, 図9)を見てみると、20代から60代までのどの年代にも職員がいるが、特に40代と50代の職員が多い。Bergfastができた1989年に就職して、働き続けている職員が、この年代に多いためである。施設長のエバ・ヨンソンさんによると、20年以上勤務している職員も少なくないという。つまり、一旦就職すれば、働き続けることができる職場なのである。

働き続けられる理由として、2つ考えられる。まず1つめに、先にも述べたように「勤務地が近い」ということである。我々がロンズボードに滞在している間にも、歩いて数分という自宅から通勤しているケアワーカーやナースに会った。2つめの理由として、勤務の形態が多様であり、自分のライフサイクルや状況によって勤務の形態や時間を自由に決めることができることが挙げられる。

表6 ロンズボードの介護・看護の事業に携わる職員 人(男性)

	サービスハウス Bergfast	サービスハウス Soldalen	ホームケアサービス	計
1. 介護職	45.0 (0)	28 (0)	34 (0)	107.5 (1)
ナース	1+0.5 (0)* ¹	0.5+0.5 (0)* ²	10 (0)* ³	12.5 (0)
ケアワーカー	40 (1)	27 (0)	24 (0)	91 (1)
OT/PT	1+3 (0)* ⁴	(1+3 (0))* ⁴	(1+3 (0))* ⁴	4 (0)
2. 厨房・食堂	4 (0)	1 (0)	(1 (0))* ⁵	5 (0)
3. 事務	(1 (0))* ⁶	1 (0)* ⁶	(1 (0))* ⁶	0 (0)* ⁶
4. その他	1 (0)* ⁷	0 (0)	0 (0)	1 (0)
計	50.5 (1)	29 (0)	34 (0)	113.5 (0)

BergfastのEchetschef (施設長) エバ・ヨンソン氏からの聞き取りにより作成 2006.12.28現在

- ※1 Bergfastのナースの0.5人は、Bergfastの責任者(Evaさん)である。ナースとして0.5人分働いている。
- ※2 Soldalenのナース2人の0.5人分は、Soldalenの責任者1人と、2つの施設の総責任者1人である。
- ※3 ホームケアサービスのナース10人が、夜間と休日にはBergfastとSoldalenの看護も行う。
- ※4 OTとPTはBergfast, Soldalen, ホームケアサービスを兼任している。
- ※5 Bergfastの厨房で、ホームケアサービスで配られる食事も調理される。
- ※6 事務員はSoldalenで働いており、Bergfastとホームケアサービスも兼任している。オズビーコムーンの職員である。
- ※7 Bergfastのその他の職員1名は、掃除のための職員である。

表7 Bergfast のケアワーカーの年齢構成

	昼間	夜間	計
~20	0	0	0
21~30	4	1	5
31~40	3	0	3
41~50	11	0	11
51~60	9	4	13
60~	4	3	7
不明	0	0	0
計	31	8	39

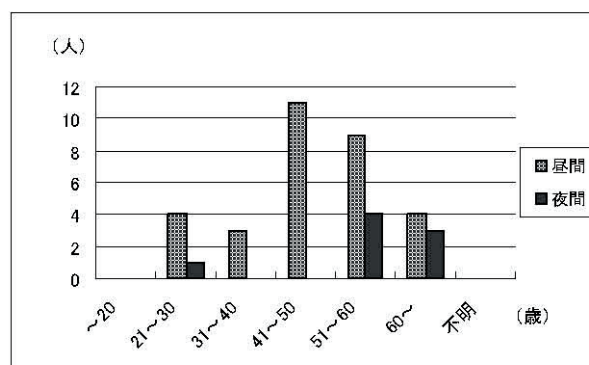


図9 Bergfast のケアワーカーの年齢構成

表6, 表7, 図9はすべて BergfastのEchetschef (責任者) エバ・ヨンソン氏からの聞き取りにより作成

2) 多様な勤務形態とその効果

施設長のエバ・ヨンソンさんによると、サービスハウスBergfastのケアワーカーのうち、4人がフルタイムの職員で、10人が日日雇用という勤務形態、のこりがパートタイマーであるという。ただし、パートタイマーといっても、日本のそれとは違い、労働時間が短いだけで、その他の条件はフルタイム就労者と同じである。月165時間労働する人のことをフルタイマーという。パートタイムは、165時間の50～85%の時間の勤務の形態を指す。日日雇用とは、その名の通り、フルタイムやパートタイムの職員が、休暇や冠婚葬祭のために人手不足になった日に勤務に入る形態である。³⁾

職員は誰でも、こういった形態の中から、子育てや就学など自分の状況にあった勤務形態を選択することができるのである。2006年12月現在で、2つのサービスハウスに働く人たちの就労状況は次のとおりである。(1) フルタイム 46人 (2) パートタイム 37人。その内訳は次のとおりである。フルタイムの50%で働く人：6人、60%：1人、62%：3人、70%：1人、75%：10人、80%：16人。図9では、50代から60代に夜間専用のスタッフが目立つ。これは、子育てを終えた人たちが、夜間に働くことを選択しているためである。⁴⁾

職員の給与は、ケアワーカーの基本給(月給)がフルタイムで16,000クローネ(2006年12月現在1クローネ19.5円として計算すると、312,000円)、ナースが21,000クローネ(409,500円)である。経験年数や週末・夜間の勤務により上乘せされる。給与の金額は、コムーンによって異なるため、財政の厳しいオズビーは、他と比べると若干低いという。また、およそ1/3が税金として徴収されることもあり、金額の面で考えると条件が大変よいとは言いがたかもしれない。そのため、介護や看護の資格を取るための専門学校の希望者が、減少してきているという。しかし、この地域で安定した就労が可能で、経験年数が給与に反映されること等を考えると、介護職・看護職は、女性が働き続けるためには魅力的な職業だといえるだろう。

ここで働く人はすべて、自分の人生設計に従って、その時々就労の形態や条件を自ら選ぶことができる。加えて、さらに自分の仕事を変えたいとか、より専門性を高めたいという希望をもつ人はすべて、その希望を実現するための公平な機会が与えられている。55歳以下であれば、国からのローンを借りて専門性を高めるための、あるいは全く異なった分野の研究・勉強に従事することができる。研究・勉強に従事する間の勤務の形態は、必然的にパートタイムか日日雇用にならざるを得ない。このサービスハウスで働いている2人の例を挙げてみたい。

1人目は、サービスハウスBergfastの施設長のエバ・ヨンソンさんである。エバさんは、1979年から89年までに、4人の子を出産した。そのたびに、労働時間を調節しながらケアワーカーとして就労を継続した。例えば、第1子および第2子出産後は、フルタイムの50%のパートタイマーとして、第3子および第4子出産後は、75%のパートタイマーとして働いた。さらに、1993年から96年までの4年間は、国からのローンを借りて、大学で看護学を学んだ。看護師の資格を習得した後、96年から98年までは、日日雇用の看護師としてBergfastで働いた。その後、施設長となり今日に至っている。

2人目は、このサービスハウスで日日雇用契約の准看護師として働いている、ニーナ ラスクさんである。現在彼女は、准看護師としてこのサービスハウスで働きながら、やはり、国からのローンを借りて、ルンド大学日本語学科で、日本語と日本文化を学んでいる。20年近く准看護師として働いてきたが、大学での勉強・研究をいかして、日本とスウェーデンの看護・介護・福祉にかんする仕事に携わりたいと思っている。働きながら学び、昇進はもとより、新たな仕事に就ける仕組みが現実には機能しているのである。



写真11 サービスハウス Bergfastで施設長のエバさん(中央)と、ニーナさん(左)、右は小縣
2006年12月28日筆者撮影

5. おわりに

見てきたように、ロンズボードにおいては、介護を必要とする高齢者に対して、自治体が施設および在宅で多様なサービスを提供することによって、高齢者がこの地域で安心して自分らしく生きていくことのできる環境を作り出していた。このようなサービスがなければ、障害をもった高齢者は、到底この地に安心して住み続けることはできなかつただろう。一方、こうした高齢者に看護・介護のサービスを提供する看護・介護の専門職にとって、この地域は、自ら働き続けることのできるかけがえのない場所である。サービスハウスにおいて、あるいは地域の住宅において、必要で適切な看護・介護のサービスを提供することによって、実際に高齢者の生活をこの地域で支えているのである。こうした専門職は、給与の中から、税金（およそ1/3）を支払うことによって、また、25%の付加価値税を払うことによってこの地域の経済活動に貢献している。彼女たちはその仕事を着実に遂行することによって、二重の意味で、この地域を支えていると言えるだろう。さらに、彼女たちは、働きながら出産・子育てをしてきている。サービスハウスBergfastで働いている女性職員50人のうち、子どものいない職員は2人である。この地域社会の将来の担い手を生み、育てている。

ロンズボードにおける看護・介護の特徴は、サービスの受け手である高齢者と、サービスの供給者である看護・介護の専門職が、ほとんど同じ地域、すなわちロンズボードの住人であることだ。ケアを受ける側も、ケアを提供する側も、顔見知りなのである。ニーナさんは、我々に、自分が看護した高齢者が偶然にも父親の友人だったということを、嬉しそうに話してくれた。「こういうことが、ロンズボードで介護をすることのよさだ」と、ニーナさんとエバさんは口をそろえて言った。サービスの受け手である高齢者からすれば、住み慣れた地域社会の中で、顔見知りの友達や看護師・介護士に囲まれて暮らし続けることができるのだ。人生の最後の時期を過ごしつつあるに違いないが、ロンズボードの高齢者の表情は、落ち着いたものだった。看護・介護を媒介として、高齢者と若者が出会うのである。必要で、かけがえのない存在として、互いを認め合う。

ここでは、人が「老いのプロセス」を学ぶことが比較的容易に行われる。自らの「老いの設計図」の素材・材料、あるいはそのモデルが、身近にふんだんに存在している。そのどの選択肢・どのモデルを選ぶかは、自分で決めればよいのである。地域社会には、それを実現させるための制度的な、あるいはインフォーマルな仕組みがしっかりと形成されている。

先に高齢化を経験したスウェーデン社会が発見した貴重な社会資源のひとつは、看護・介護の社会化を媒介とした世代間の連帯のシステムであり、それによって実現する持続可能な地域社会であり、その中で自らの生き方を設計し実現していく「個人」の存在であった。

- 1) 井上誠一 2003年『高福祉・高負担国家 スウェーデンの分析』中央出版 137ページ
- 2) 外山義「社会政策としての生活環境整備」岡沢憲英・奥島孝康編 1994年『スウェーデンの社会 平和・環境・人権の国際国家』早稲田大学出版部 35ページ
- 3) スウェーデンの女性は、育児休業を取りながら、就業を継続する人の割合が高い
平成17年版『国民生活白書』72ページ～74ページ
- 4) スウェーデンでは、子どもが増えても雇用者率は下がらない
平成18年版『国民生活白書』77ページ

【参考文献】

- ペール・ブルマー&ピルッコ・ヨンソン、石原俊時訳 2005年『スウェーデンの高齢者福祉 過去・現在・未来』新評論
- イリス・ペリッツ、今福仁訳 2005年『スウェーデン人 我々は、いかに、また、なぜ』新評論
- 奥村義孝 2005年『スウェーデンの高齢者・障害者ケア入門』筒井書房

- 竹崎孜 2004年『スウェーデンはどう老後の安心を生み出したのか』あけび書房
 井上誠一 2003年『高福祉・高負担国家スウェーデンの分析 21世紀型社会保障のヒント』中央法規
 藤井威 2003年『スウェーデンスペシャルⅢ』新評論
 藤井威 2002年『スウェーデンスペシャルⅡ』新評論
 藤井威 2002年『スウェーデンスペシャルⅠ』新評論
 奥村義孝 2000年『新スウェーデンの高齢者福祉最前線』筒井書房
 伊藤和良 2000年『スウェーデンの分権社会 地方政府ヨーテボリを事例として』新評論
 岡沢憲芙・奥島孝康編 1994年『スウェーデンの社会 平和・環境・人権の国際国家』早稲田大学出版部
 岡沢憲芙・奥島孝康編 1994年『スウェーデンの政治 デモクラシーの実験室』早稲田大学出版部
 岡沢憲芙・奥島孝康編 1994年『スウェーデンの経済 福祉国家の政治経済学』早稲田大学出版部
 齊藤弥生・山井和則 1994年『スウェーデン発 高齢社会と地方分権』ミネルヴァ書房
 外山義 1990年『クリッパンの老人たち スウェーデンの高齢者ケア』ドメス出版
 総務省統計局ホームページ <http://www.stat.go.jp>
 国立社会保障・人口研究所ホームページ <http://www.jpss.go.jp>
 SCBホームページ <http://www.scb.se>
 Osby kommunホームページ <http://www.osby.se>

付記：2006年11月2日および12月26日から29日までの我々の現地調査に、辛抱強く、また親切に協力してくださった、ロンズボードの皆様に心からの感謝を捧げたい。とりわけ、オズビーコームーンのロンズボード支所で様々な統計を説明して下さったエリック・ヨンソン氏はじめ2つのサービスハウスの職員および入居者の方々、サービスハウスBergfast施設長エバ・ヨンソン氏、訪問看護に我々を同行させて下さった看護師のマリア氏、私たちの調査すべてに参画し、助言し、通訳を務めてくれた友人のニーナ・ラスク氏に心からの感謝を捧げたい。又、岐阜大学と学術交流協定を結んでいるルンド大学日本語学科の皆様、とりわけ鈴村和代先生に御礼を申し上げます。

担当：小林 1, 4, 5
 小縣 2, 3